

【試し読み版】



八坂書房

4

【第 I 卷第 7 章】

# 7

---

ジンプリチウスは、  
みすぼらしい宿屋で親切をうける

いっただいどうやってわたしがまた意識を取り戻したのか、それはわからない。確かなのは、わたしが回復して目覚めたとき、あの老人がわたしの頭を膝にのせながら、わたしの上着の前を開いてくれていたことである。しかし隠者の顔がほんのすぐ近くにあったものだから、まるで心臓を体から食いちぎられる瞬間でもあるかのように、わたしは恐怖のあまりとてつもない大声をあげた。すると隠者は言った。「わが息子よ、さあ静かに。何もいやなことはいらないから。さあ安心しなさい、云々」

そうやって隠者はわたしに優しい言葉をかけ、体をさすってくれるのだが、相手がそうすればするほど、わたしはもっとわめき、ひたすら叫び声をあげつづけた。

「うわあ、喰われちまう、喰われちまうよ！ おまえは狼だろう、だからおれを喰おうっていうんだろう！」

隠者は言った。「やれやれ、わが息子よ、そんなことがあるかい。どうか安心しなさい。おまえを食べたりはしないから」

この言い争いはさらに長いこと続いたが、やつこのことで説得を聞き入れたわたしは、隠者とともに、彼が棲む庵に行くことにした。さて到着してみると、この隠者の庵は、まさしく貧しさが家の執事であり、空腹が料理人であり、欠乏が料理長である、という風情だった。わたしの空っぽの胃は、ここで野菜のお粥と器に一杯の水を与えられて大喜び、あれほど錯乱していたわたしの心も、老人の優しく

親しみをこめた慰めの言葉に、ようやくまたしつかりとした境地を取り戻すことができた。落ち着いたわたしは、やがて甘美なる眠りの誘惑におそわれ、自然の本性が求めるものにあっさりと従った。隠者のほうもわたしの体がそれを必要としていることを悟り、そもそも庵のなかには一人分しかない寢床をわたしに譲ってくれた。それから後、ふたたびわたしが目を覚ましたのは、だいたい真夜中ごろのことである。隠者はその時、次のような唄をうたっていて、それがわたしの耳に届いてきた。後にわたしも別のところで覚えることになる唄である。<sup>(1)</sup>

来たれ、おお、ナイチンゲール、夜のなぐさめよ  
きみの声を、よろこびの響きとして

このうえなく愛らしく、鳴りわたらせてくれ。

来たれ、来たれ、きみの創り主をほめたたえよ

ほかの鳥たちは眠ってしまい

もう、歌うことはできないから

きみのそのささやかなる声を

大きく鳴り響かせてくれ、なぜなら

だれよりもきみこそが

あの高き天にまします神を、美しくほめたたえること  
ができるのだから

陽の光は消えうせ

暗闇に閉ざされるほかない、わたしたちは

それでも、歌うことができる

善き神と、その大いなる力について歌うことは。

神をほめ歌うわたしたちを、いかなる夜も<sup>(2)</sup>

さまたげることにはできない。

だからきみのそのささやかな声を

鳴り響かせてくれ、なぜなら

だれよりもきみこそが

あの高き天にまします神を、美しくほめたたえること

ができるのだから

森のおとの響きかえしよ、あの木霊の精も

このよろこびの響きに集い来て

歌ごえを聞かせてくれる。

いつもわたしたちがとらわれてしまう

もの憂さ<sup>(3)</sup>を取りはらい

眠りの罨をかわす、尊いすべを教えてくれる。

だからきみのそのささやかな声を——云々

空にかがやく星たちは

神をたたえるために、そして

神をうやまうために、今こうして姿を見せた。

歌ごえとはほど遠い、ふくろうでさえも

そのうなり声でこそ、伝えている

神はすばらしき、ほむべきものなりと。

だからきみのそのささやかな声を——云々

さあここへ、さあ、愛すべき小さな鳥よ

倦まず、たゆまずいそしむわたしたちは

寢床にすがり、眠りをむさぼることはすまい。

やがて朝やけの光が、このうら寂しき森に

よろこびをもたらすまで、神をたたえて時をすごそう。

きみのそのささやかな声を

大きく鳴り響かせてくれ、なぜなら

だれよりもきみこそが

あの高き天にまします神を、美しくほめたたえることができるのだから

こんな唄がずっと聞こえているあいだ、わたしにはまるでナイチンゲールが、ふくろうや木霊と一緒に、本当に声を合わせて歌っているような思いがした。もしあの時、この「明星のうた」<sup>(4)</sup>をすでに知っていたか、あるいはバグパイプでその調べを奏でることができるかしていたら、わたしはすぐさま隠者の庵から飛び出して、自分も一枚加わっていたにちがいない。なぜならこの唄のハーモニーは、わたしにとって本当に心地よい、愛すべきものだったからである。

ともあれわたしはまた眠りに落ちてしまい、それからようやく目を覚ましたのは、日の出の後にかなり時が経つてからのことであつた。この時、目の前には隠者が立つていて、わたしにこんなことを言つた。「さあ坊や、起きようか。朝ごはんをとりなさい。そしてこれを食べ終わつたら、おまえに森を抜けていく道を教えてあげよう。そうすればまた人たちのところへ戻れるから。夜になる前には、いちばん近くの村に着けるだろうさ」

わたしは言われたことの意味がよくわからず、男に尋ねた。「へヒトタチ」とか、「ムラ」とか、それはいつたい、何のことだい」

隠者は言つた。「おまえは今まで、村という場所にいた

ことがないのかね。人たちとか人間とか、それが何のこと  
かも知らないというのかい」

「知らねえ」とわたしは答えた。「おれは、〈ここ〉にし  
かいたことがねえから。だけど、〈ヒトタチ〉とか〈ニン  
ゲン〉とか〈ムラ〉ってのは、いったい何なんだい、教え  
てくれよ」

隠者は言った。「おお、神がおまえと共にあるように。

おまえは阿呆であるのか、それとも賢いのか」

わたしは答えた。「やれやれ。おれさまが何ものかとい  
うとだね、〈カカさま〉と〈トトさま〉の〈ぼうず〉、それ  
がおれだよ。〈アホウ〉とか〈カシコイ〉とか云うものじ  
ゃないね」

隠者は驚愕してため息をつき、胸に十字を切った。そして言うには——「愛すべきおまえよ、なるほど。わたしは心に決めたよ。神の栄光にかけて、おまえに大切な教えを授けることにしよう」

こうしてわたしたちの問答が始まった。それは次の章に書いてあるとおりである。

〔訳註〕

(1) 以下の唄は、ドイツ十七世紀、いわゆるバロック時代の名詩を集めるアンソロジーが後世において編まれる際に、本作から独立させた形で、ほぼ必ず収められている重要な作品。十九世紀ドイツ・ロマン派の詩人たちにも深いインスピレーションを与えて、多くの作品に言及される。

そもそもは十七世紀の著名なプロテスタント讃美歌詩人であったPh・ニコライの宗教詩「明けの明星のなんと美しく輝くこと」(EGTO)に基づく本歌取りの手法をとっている。ニコライの詩は大バツハの教会カンタータ第1番(BWV1)でもよく知られる。韻律と詩節の構成と韻律において両者はまったく同一であり、この場面で本作の隠者は元のニコライの讃美歌の旋律で歌っていると推測される。

(2) 脚韻をつくる「夜」(Nacht)の語は、初版を含む他のいくつかの版では「(政治的)権力」(Macht)とあるが、そうすると次行末に全く同一の単語が来ることになるゆえ、先行研究のテキスト考証に従い、作者の没後すぐに出版された全集版の表記をとることにする。

(3) 本作を、ヨーロッパ古来の占星術の伝統のもとに解読しようとする先行研究は、主人公が生涯のなかで何度か活発な行動を停止し、心身を停滞させ、沈黙考の期間に入ることに注目する。ここに言われる「もの憂さ」は、この占星術の意味での身体的・精神的な倦怠感、すなわち土星の支配をうけたメランコリー型の人間の特徴として理解されるといふ。それに従うなら、本作にはこの土星的な憂鬱質に関わるモチーフが

点在しており、この唄のすぐ後に登場する「ふくろう」もその一つだといふことになる。

(4) この呼び方からも、先述のルター派聖職者ニコライ作の詩が、作者グリンメルスハウゼンの念頭にあったと推測できる。プロテスタントの町ゲルンハウゼンに生まれた作者は、この唄を幼少期に学校や教会で学んだと思われる。

[著者紹介]

ハンス・ヤーコプ・クリストツフェル・フォン・  
グリンメルスハウゼン

Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen (1622頃-1676)

ドイツ・バロック文学を代表する小説家・著述家・暦作者。ドイツ中西部ヘッセン地方の古都ゲルンハウゼンに生まれ、パン職人だった祖父のもとで育つ。三十年戦争に従軍して各地を転戦したあと、ドイツ南西部の上部ライン地方に居を定め、貴族の所領における執事、酒場の主人、町の代官としての職務をこなす生活のなかで、晩年の十年足らずのあいだに数多くの著作を執筆する。支配階層と民衆層の中間領域を生活圏として社会の緊張関係をつぶさに観察しながら、近世ヨーロッパに成立するピカロ（悪漢）小説と阿呆文学の傑作群を残したが、変名のもとに書かれた代表作『ジンプリチシムス』の著者であることが世に明らかとなったのは、ようやく19世紀中葉のことだった。当代の大ベストセラーはやがて「ジンプリチシムスもの」と呼ばれる類似作品のブームを没後においても発生させる。時代の硬軟さまざまな言説に取材しつつ、それと戯れるように形成された生氣あふれる言語表現は、後のグリム兄弟によるドイツ学の営みにとっても貴重な資料となった。

[訳者紹介]

吉田 孝夫 (よしだ・たかお)

1968年鳥取県生まれ。

奈良女子大学文学部教授。

京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了（ドイツ語学ドイツ文学専修）。博士（文学）。

著書に、『山と妖怪 ドイツ山岳伝説考』（八坂書房）、『語りべのドイツ児童文学 O・プロイスラーを読む』（かもがわ出版）、訳書に、プロイスラー『わたしの山の精霊ものがたり』、『かかしのトーマス』、『ニット帽の天使』（さ・え・ら書房）、ラーニシュ『図説 北欧神話の世界』、ホイスラー『図説 ゲルマン英雄伝説』、ザルトーリ『鐘の本』、グリム兄弟『ドイツ伝説集』（八坂書房）などがある。

ジンプリチシムス——原典訳『阿呆物語』

【試し読み版】その④

グリーンメルスハウゼン作

吉田孝夫訳

二〇二六年三月二十五日 発行

発行所 (株) 八坂書房

千代田区神田猿樂町一—四—十一

©2026 YOSHIDA TAKAO 無断複製・転載を禁ず

本ファイルは試読用に判型を変え再編集したものです。  
総目次、ならびにその他詳細はこちらをご覧ください。

<http://www.yasakashobo.co.jp/books/detail.php?recordID=787>